

◆海員随想

戦後日本の食糧支えた母船式漁業 興隆期の記憶をたどる③ 清水 陸明 当時は、通信長
【初めての南氷洋】

横浜港南大栈橋に集結した橋立丸捕鯨船団は 1948(昭和 23)年 11 月 3 日、消防団演奏の音楽と多数の見送りの中、華やかに第 3 次南氷洋捕鯨事業に出港した。戦後の GHQ による電子機器の制限は継続されているが、南鯨船団所属の大型船には無数の大小氷山と流氷、間断なく発生する濃霧と時化等、過酷な気象条件から旧海軍の九九式電波探知機の設置が許可されていた。

視界不良ともなると船橋の下の狭い電探室に籠り、大きな電磁ラッパ(送、受信用 2 基)を手動で回しながら、直径 10 センチくらいのブラウン管に表示される雑音映像の中から波形の強弱大小を見極めて(右〇〇度〇〇浬(かいり))に氷山の大小、あるいは船舶あり)と伝声管により、船橋に伝える業務もあり、もちろん通信士の主任務は捕鯨船との絶え間ない緊密な連絡、僚船、内地との連絡等々、無線室には常時 2 人が当直、通信士は母船 6 人、冷凍塩蔵工船は 4 人で構成されており、競合するオーストラリア、オランダ、ノルウェー、ニュージーランド、ソ連などの他船団の動向の把握には、捕鯨船通信士ともども努力していた。

翌 1949(昭和 24)年 4 月横浜港に帰港。揚荷終了、日立造船因島工場に入渠して南鯨初体験終了。
1951(昭和 26)年アメリカと講和条約締結、マッカーサーラインが廃止され、ようやく海運、水産業とも外洋への道が開かれた。

「海員だより」